

花粉症患者動向調査（世田谷区内クリニック）

浅香耳鼻咽喉科クリニック 浅香大也

スギ・ヒノキ花粉シーズンに、世田谷区の浅香耳鼻咽喉科クリニックを受診した花粉症患者の受診状況を調査した。

1 調査期間

令和5年1月2日～令和5年5月14日

2 調査内容

(1) 初診・再診患者数の変動

上記期間に来院したスギ・ヒノキ花粉症患者に対して、診療日ごとの初診患者数、再診患者数を集計し、飛散花粉数との関連性を検討した。

※ 初診・再診について

初診：調査シーズンにおける、症状が出てから初めての受診
(症状が出る前の初期治療としての受診は初診としない)

再診：初診としてカウントした後の受診

※ 飛散花粉数は、大田区のダーラム測定器で測定したデータを用いた。

※ 週計の期間は、患者数については月、火、木、金、土、飛散花粉数については日曜日～土曜日の合計数とした。

(2) 飛散花粉数と初診時の自覚症状、QOLとの関連性

(1)の患者に対し、全体の症状の印象について調査を行った。また、日本アレルギー性鼻炎標準QOL調査票を用いて初診時の自覚症状を検討した。

※ 初診時自覚症状と花粉数の相関に関する検討においては日曜日～土曜日の飛散花粉数の総和と月、火、木、金、土の患者の自覚症状の平均で検討した。

(3) 舌下免疫療法の効果測定

スギ舌下免疫療法を施行中の患者198名のうち、日本アレルギー性鼻炎標準QOL調査票の記入に同意を得た患者137名について、自覚症状の検討を行った。調査票は、スギ花粉シーズン終了後の5月にLINEで問診票を送信し、今シーズンを振り返って最も症状のつらかった時期の症状を記入してもらった。比較対象として、当院を受診した花粉症患者のうち、花粉飛散ピークの週を2週抽出（3月6日～19日：第10、11週）し、その時期に受診した初診患者の問診結果を用いた。

3 調査結果

(1) 患者数と飛散花粉数（表1、図1）

令和5年の飛散花粉数は、6,884個/cm³であり、前年の1.7倍だった。総患者数は1,496名で、前年の1.4倍だった。内訳では、初診患者数が1.4倍、再診患者数が1.5倍だった。令和5年の舌下免疫受診患者は198名であった。

本年は、COVID19感染者の減少やCOVID19に対する警戒心が緩和したため、前年と比較して初診患者数、再診患者数ともに増加した。舌下免疫療法は4年間の

継続治療を勧めているため患者数は昨年の1.2倍であった。また、本年は花粉の飛散数が多いことが影響して、薬の変更や生物学的製剤の導入を希望する患者が多く、再診患者数は例年より多かった。

表1 患者数と飛散花粉数

	2023年	2022年	2022年に対する比率
飛散花粉数(個/cm ³ /シーズン)	6,884	4,147	1.7
総患者数(初診+再診)(人)	1,496	1,055	1.4
初診患者数(人)	1,104	790	1.4
再診患者数(人)	392	265	1.5
舌下免疫療法を受けている患者数(人)	198	163	1.2
飛散開始日	2月18日	2月15日	

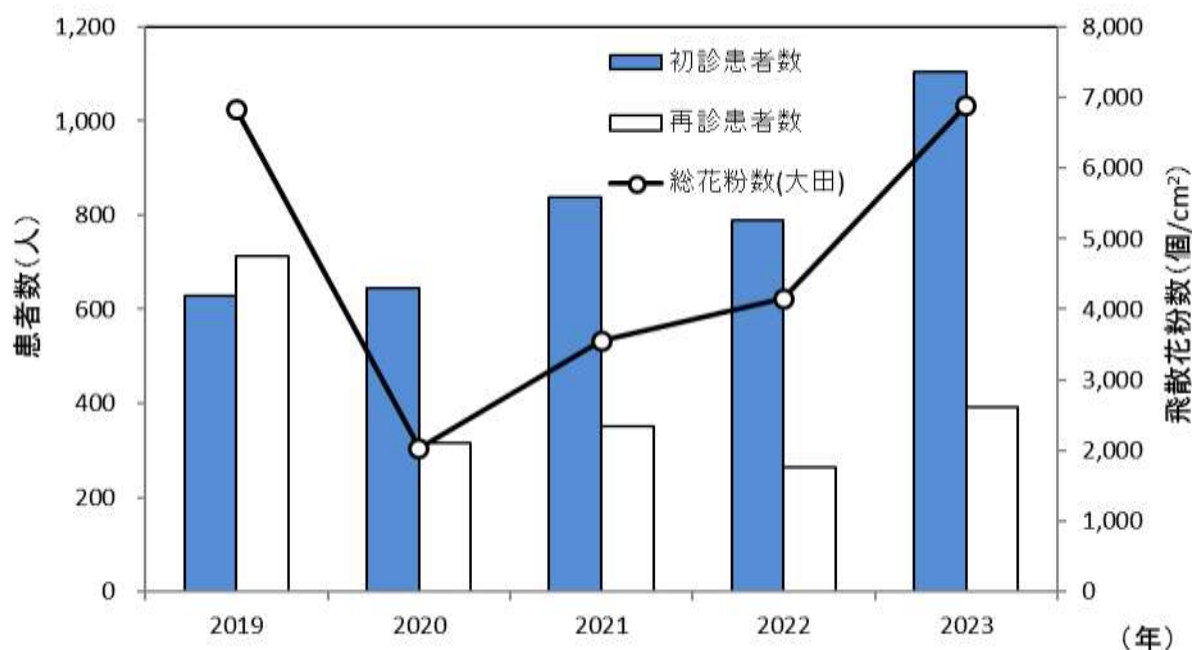


図1 患者数と飛散花粉数(2019年-2023年)

① 初診患者数の変動 (図2)

- ・ 花粉の飛散開始日は2月18日で、前年と比べて3日遅かった。
- ・ 初診患者数の立ち上がり(30名以上/週)は、1月23日~1月30日(令和5年第4週)であり、飛散開始日よりも約3週間早かった。
- ・ ピークの時期は、2月27日~3月5日(令和5年第9週)であり、前年(3月14日~20日 令和4年第11週)より約2週間早かった。
- ・ 初診患者数のピークは228名であり、当院にて調査が行われた2019年以来最多であった。これは前年(158人)の約1.4倍だった。
- ・ 初診患者の立ち上がりからピークまでは5週間であり、前年(6週間)よりも1週間短かった。
- ・ 初診患者数のピークは大田区の総飛散花粉数のピークの約1週間前であった。

② 再診患者数の変動 (図2)

- 再診患者数の立ち上がり (30人以上/週) は、2月27日～3月5日 (令和5年第9週) で、ピークは3月27日～4月2日 (令和5年第13週) だった。

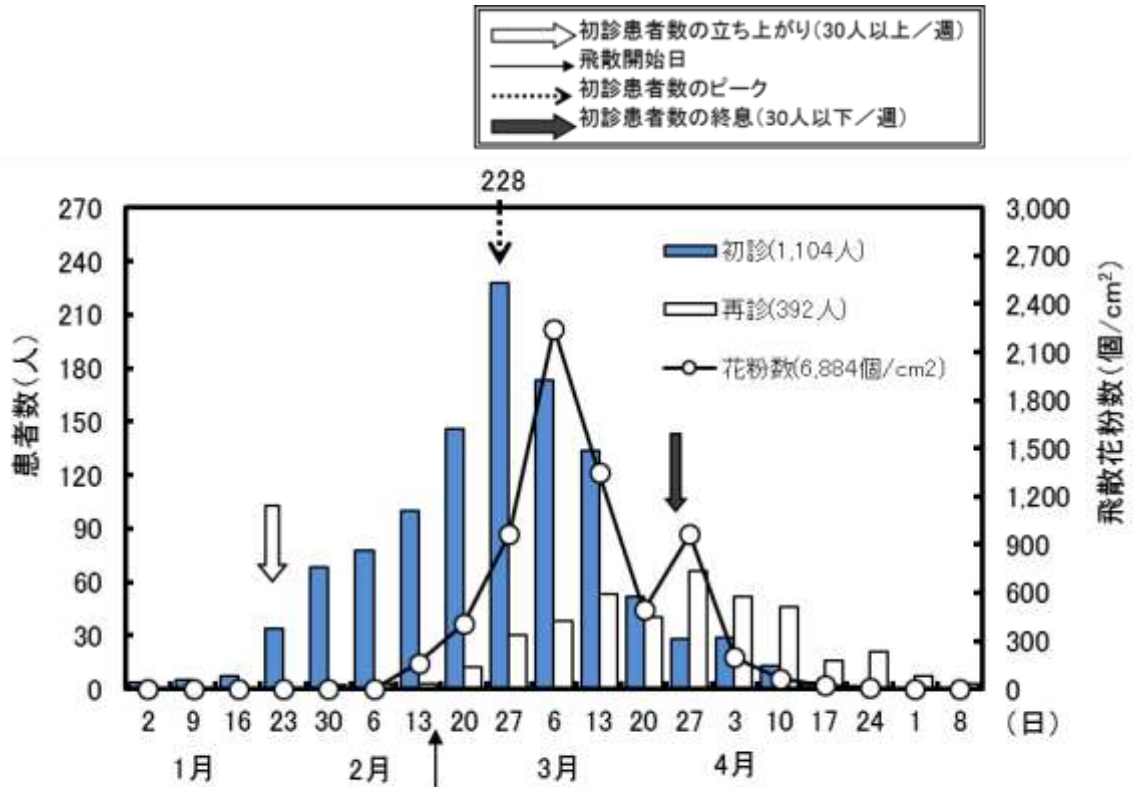


図2 週毎の患者数と飛散花粉数(2023年(令和5年))

(2) 飛散花粉数と初診時の自覚症状、QOLとの関連性 (図3～図6)

自覚症状と花粉飛散数は例年通り有意に相関した ($R^2=0.54$)。総合症状スコアの平均が12点 (鼻、眼の自覚症状がすべて2点以上) を超えたのは、第11、12、13週 (ピークは12週) であり前年より1週間遅かったが3週間認められた。これは、花粉飛散開始日が前年より3日遅れたためと考えられる。また、総合症状スコアが10点を超えた週は、全6週 (第8週～13週) と昨年より3週多く、花粉飛散数の増加に伴って症状を強く訴える患者が多かった。QOLスコアの平均においても、花粉飛散数と有意に相関した ($R^2=0.59$) スコアのピークが第9週であり、花粉数の飛散ピーク時期より1週間早かった。

相関係数が前年より高かったのは、新型コロナウイルス感染症が5類対応となったためと考えられる。すなわち、令和4年1月～2月はオミクロン第6波の時期で、花粉症と新型コロナウイルス感染症の鑑別を求めて症状が軽症でも早めに受診する患者が多く、花粉飛散数との相関に影響したと考えられる。

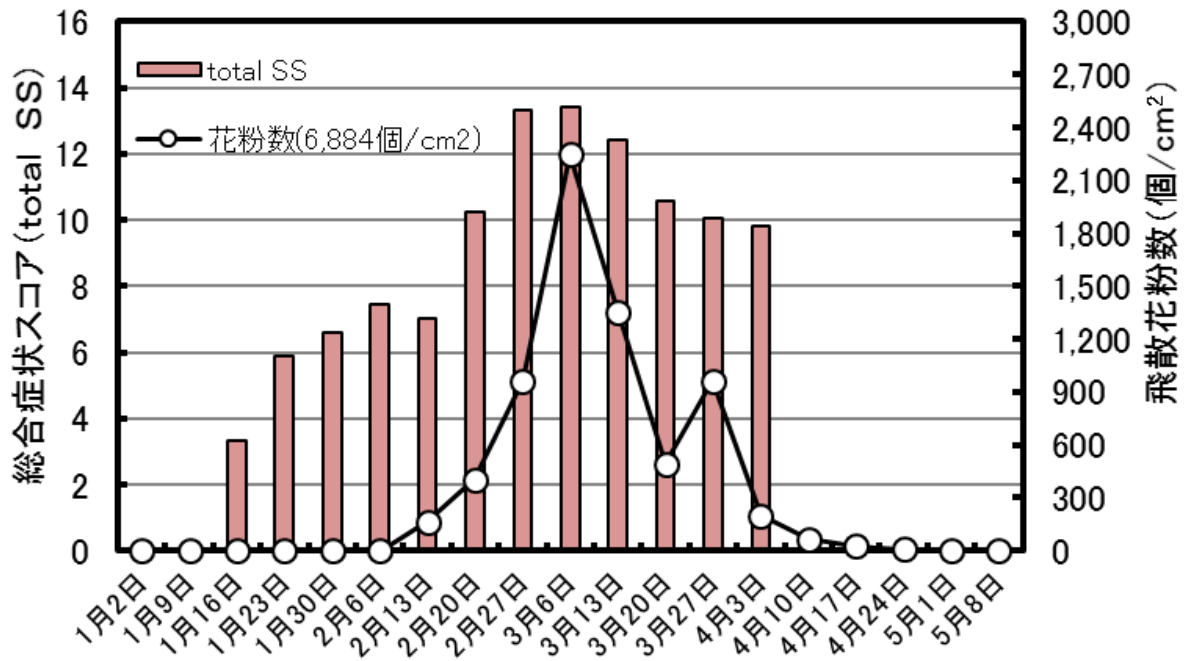


図3 週毎の飛散花粉数と総合症状スコアの平均(2023年)

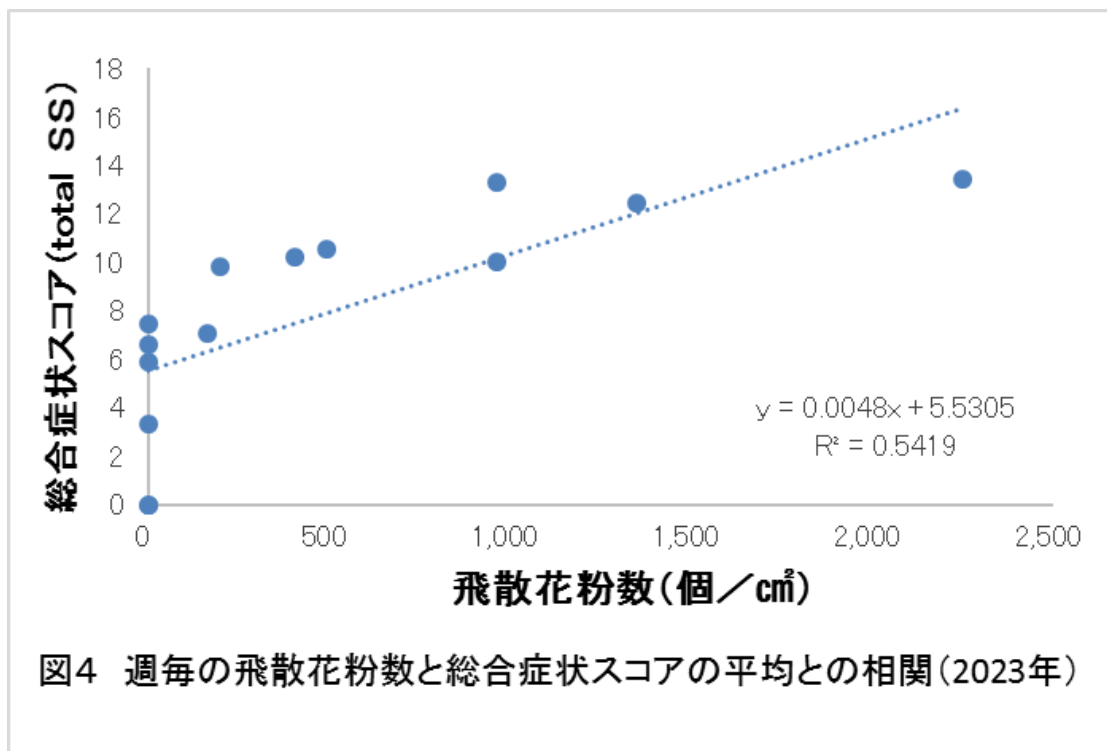


図4 週毎の飛散花粉数と総合症状スコアの平均との相関(2023年)

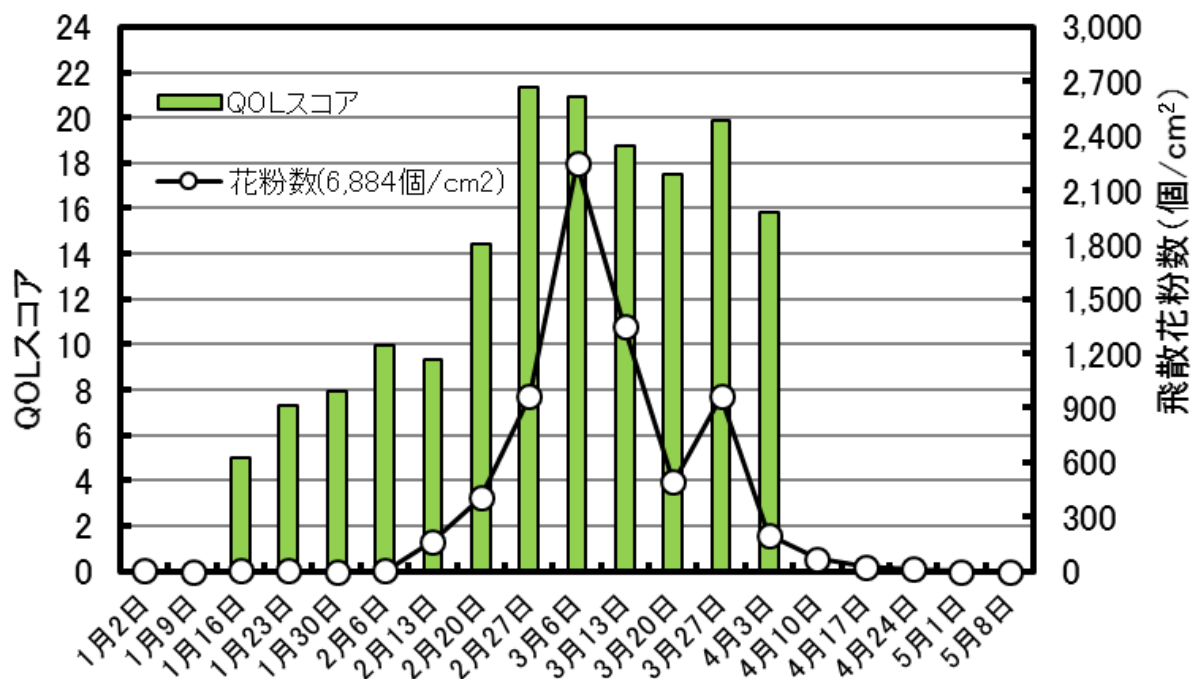


図5 週毎の飛散花粉数とQOLスコアの平均(2023年)

(3) 舌下免疫療法の効果について (表2、図7)

スギ舌下免疫療法施行群は飛散ピーク時に受診した初診患者群と比較して有意に自覚症状が抑制されており、舌下免疫療法の有用性が改めて示された。また、昨年と比較して舌下免疫療法施行群の自覚症状は高い傾向を認めた (5.82)。これは今年の花粉飛散量が多いためと考えられる。

表2 花粉飛散数と舌下免疫治療群の自覚症状

	症状平均(2023)	症状平均(2022)
花粉飛散数	6,884	4,147
スギ舌下症状	5.824817518	5.130081301
飛散ピーク時の症状	12.91065041	11.752

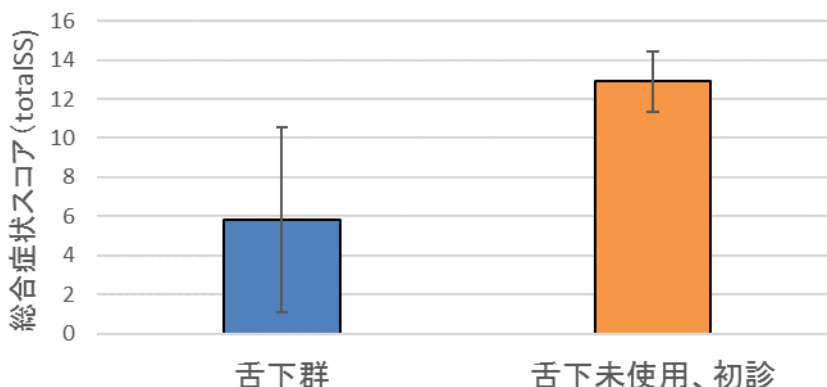


図7 舌下免疫療法群と花粉飛散ピーク時に受診した初診患者群の比較

4 まとめ

- ・令和5年の花粉症総患者数は1,496名で、前年の1.4倍だった。内訳では、初診患者数が1.4倍、再診患者数が1.5倍だった。
- ・初診患者数のピークは228名と、当院での調査史上最多であり前年(158人)の約1.4倍だった。
- ・総合症状スコアの平均が12点(鼻、眼の自覚症状がすべて2点以上)を超えたのは、第11、12、13週(ピークは12週)であり前年より1週間遅かったが3週間認めた。また、総合症状スコアが10点を超えた週は、全6週(第8週~13週)と昨年より3週多く、花粉飛散数の増加に伴って症状を強く訴える患者が多かった。
- ・スギ舌下免疫療法施行群は飛散ピーク時に受診した初診患者群と比較して有意に自覚症状が抑制されており、舌下免疫療法の有用性が改めて示された。